ぼろのいい湯かげん

まだタイトルが決まらないボクの初夢

ボクがエル・チャレンジを創った時、知的障がい者の総数は五〇万人と思っていた。だけど、ホームレス全国調査をやってみて、多数の知的障がい者が療育手帳を持たずホームレスになっていることを知った。また、刑余者支援ネットワークを始めたら、刑務所に多数の知的障がい者が服役していることに驚いた。ある識者は知的障がい者の総数を三百万人と推計している。先日、ボクは、炭谷茂さんが提唱するソーシャルファーム・ジャパンの結成に参画し、運営委員となったが、炭谷さんは講演で、就職困難者の総数を二千万人と推計した。ボクが、七年前、地域就労支援センターの創設に参加した頃の就職困難者の推計は、その半分にも満たなかったと思う。ボクは、豊かさに覆い隠されてきたわが国の「二重構造」を見た気がした。そして、いま、「富」から「貧」への大規模な人口移動を目の前で見ているような日々が続いている。

そして、ボクは、「社会の福祉化」という、漠とした夢想に耽(ふけ)った。かつて、エル・チャレンジを創った時の「行政の福祉化」は、制度（財源）に頼れないから、関係（契約等）の見直しで、福祉を興すという意味だった。あの時の、あの着想の、より大規模な展開が「社会の福祉化」ということだ。

去る年の一番の朗報は、Aダッシュ創造館という職業訓練センターを、高見一夫君という有能な社会企業家達と一緒に設立したLLP（有限責任事業組合）大阪職業教育協働機構で受託できたことだった。ボク達がそこで夢想したのは、都市生活関連産業への産業、労働移動の手助けだ。その着想に、府の出資法人というような経営手法から、LLPのような協働手法への移行を重ね合わせた。ボクは、ここでは、とりあえず「産業の社会化」と銘打って、微力だが、何かしらの仕事をしたいと決意している。

ともかくも、ボクの目の前の光景がドラスティックに変わろうとしている。

去る年を表現した「チェンジ」では言い表せない、変わりゆく社会に対する自己認識を何と表現して、初夢にタイトルをつけたらいいのだろう？とりあえず、「オルタナティブ―新しい道を歩もう―」という仮題をつけておくので、誰か、ボクの初夢に入ってきてほしい。

2008年の「今年の漢字」に「変」が選ばれ、京都市東山区の清水寺で発表された。世界的な金融情勢の変動や、米国で「change（変革）」を掲げて誕生したオバマ次期大統領、物価上昇で生活が変わったなどが理由という。

京都新聞より

㈱ナイス代表取締役　冨田一幸

こうあるべき逸曲（いっきょく）

hidarimaki

アナログレコードの逆襲その19
オールマン・ブラザーズ・バンド「ウィッピング・ポスト」アルバム「フィルモア・イースト・ライブ」から

アルバム名にもなっている「フィルモア・イースト」とは、音楽プロモーターであるビル・グラハムが、65年サンフランシスコに「フィルモア・ウエスト」を開業、続く68年N・Yでも開業した「フィルモア・イースト」のことであり、ロック・ライブの殿堂といわれた。

音楽文化の理想をかかげ、数多くのミュージシャンたちが伝説を誕生させた。その頃、これら両フィルモアを舞台としたいくつかのドキュメント映画が公開され、そのたび僕も映画館に足繁（あししげ）く通った。ジェファーソン・エアプレイン・グレイトフル・デッド、クイックシルバー・メッセンジャーズなどは、これら公開された映画によってより深く知ることになった。

このアルバムは71年、フィルモアが閉鎖される直前に録音されたものと考えられる。

オールマン・ブラザーズ・バンド（以下OBB）は、67年南部ジョージア州メイコンで誕生した。サザン・ロックの雄と評価され確かな足取りを続ける中の71年、天才ギタリスト＝デュアン・オールマン、翌年ベーシスト＝ベリー・オークリーらOBBの中心人物二人が共に事故で他界した。このアルバムは「フィルモア・イースト」最後のライブであり、そして2人がOBBに在籍した最後のアルバムであり、またOBBとしては3枚目のアルバムになる。

「フィルモア・イースト・ライブ」は、2枚組みの実況録音盤として発表されたが、ライブ音源とはこれだ！といえるぐらいどの曲も素晴らしく、そして臨場感に満ちた作品に仕上がった。とくに2枚目B面全てに収まった「ウィッピング・ポスト」は、23分以上の長セッションである。デュアン・オールマン、ディッキー・ベッツのギターがスピードを上げ、2組のドラマーが追いかける。グレッグ・オールマンのオルガンが添うようにメロディーを編みながら走る。追いつき追い越せのまさにサウンド・カーチェイス！

セッションが疾走し、まるで永久運動のように後半まで留まることがない。相互の重量感あるプレイが競合されそして収束していくのだが、ブルースの新しい解釈、ロックとしての進化、そのうえで、南部のセンチメントさえ感じさせて（といっても僕はアメリカにさえ行った事がないけれど）、本当にグレイトフルなバンドだと実感した。

2人を失ったOBBはその後新しいメンバーを加え、より一層のパワフルさとOBBの伝統を引き継ぎながら、70年代のサザン・ロックを牽引していく。

hidarimaki